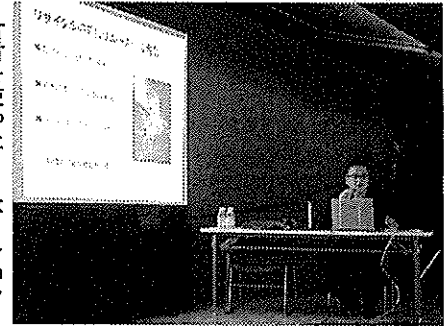


小畑丸嘉社長

古材を使用したリノベーションについて講演

古材を使ったリノベーションをテーマに講演する小畑隆正
・丸嘉社長



株式会社丸嘉社長の小畑隆正氏はこのほど、大阪市内で開催された「リビング&デザイン2015」で、同社が手掛ける古材を使ったリノベーションについて講演した。丸嘉は1859（安政6）年に材木商として京都市伏見区で創業。5代目となる小畑氏は、下請けからの脱却を目的に、これまで不用品として処分されていた古材の活用

を始めた。解体される京町家に使われていた柱や梁などをフローリング材や家具などに再生させ、国内だけでなく世界中のから顧客を集めている。また近年では国産材にとどまらずカナダの古材を持つ特性に着目、木のスペシャリストとして培ったノウハウを店舗開業プロジェクトにも応用するなど、多方面に活躍している。

小畑氏は「最近に作られた店舗や商業施設で古材を含め、木が多く使われていることにお気づきでしょうか。客は買い物だけでなく、木の持つ温かみや懐かしさによって、癒されたいという潜在的な目的で訪れてくるからだと思います」と、木が人に与える効能について説明。同社が得意とする古材について「一点一点それぞれにいた傷や煤やけが表情が異なっており、それが味として魅力を増します。山で100年かけて育った木がさらに100年間京町家として役割を果たします。一般的には解体された際、木材はバラバラにされ、チップ材と形を変えリサイクルされますが、私は一度役目を終えた木を古材として、次の100年の命を与えたいと考えています。また、木と云うものは乾燥するほどに強度が出ますが、古材はじっくりと天然乾燥され、木材として一番使い頃の資源です。古材が持っている優れた特性を捨てることに等しいチップ加工よりも、そのまま別の形に生まれ変わらせるリユースこそ大切なのではないでしょうか」と持論を展開した。

さらに「スクラップ&ビルドに代表される新しいもの主義から、使い続けることを前提としたリノベーションで持続可能な社会に少しでも貢献できれば。時代とともに人の価値観も変わりますが、木に囲まれて生活している日本人には、木と暮らした長い歴史があります。このあたりで原点回帰し、木に囲まれた空間の中に身を置き、木のもつ温かみに触れ、安らぎを感じることで、ストレスを少しでも緩和しませんか」と、木の持つ可能性に触れることの有用性を説き締めくくった。